触手で乳房を引きちぎらんがばかりに巻き締めて引っ張り上げ、多数の瘤が付いた触手でライリーの股間をごりごりと擦り上げる。
「っ……く……この程度、か？　女を啼かせるにはまだまだ研究不足だな」
事実、痛みしか感じなかった。しかし、あるとき状況は一変した。バグベアードが一瞬瞬き、赤い光がフラッシュのように一瞬乳房を照らしたのである。
「うっ⁉　な、な……は、……あ……あ……あぁぁぁぁぁぁあああ‼」
その瞬間ライリーはスーツに包まれた肉体を大きくのけぞらせて嬌声を上げた。今までただ乱暴に揉み潰され、苦痛でしかなかったはずの乳房嬲りが突然えもいわれぬ快感へと変貌したのである。
（な……んだっ……これは……？　おかしい……っ……私の身体の反応が、おかしいっ……！）
状況が理解できぬままにライリーは甘ったるく熱を持った乳房を揉みしだかれた。堅かった肉の塊がつきたての餅のように柔らかくなった。
触手が人の五指のようにぐにぃっと肉に食い込むと、そこからどうしようもないほどの悦感電流が産まれて、乳房中を跳ね回っていく。さらにそのまま揉み立てられれば、行き場を失った悦感は乳房の中でわだかまり、乳芯を熱く火照らせていく。
直火で炙られるような甘い熱は両乳房一杯に広がり、控えめだった乳首と乳輪がぷっくりとふくれあがって勃起状態になった。
（う……こんな短時間に……はぁ……興奮状態に、なるなんて……）
もう軽口もたたけず、ライリーは甘い快感の喘ぎ声が出そうになるのを噛み殺すので必死だ。しかしそんな頑固な研究者をさらに辱めるべく新しい責めを加えた。
バグベアードは再び瞬きをすると、今度はじっと勃起乳首を見つめたのだ。
「あひっっ⁉　いいいいいいいいいっっっっっっっっ‼」
一瞬ジュッ！　という音がするかと思うほどの熱さが走った。それはすぐに両乳首そのものが破裂しそうなほどの甘い疼きとなって、ジンジンと肉突起を責めさいなむ。
（そう……か……。『魔眼』か……！）
魔術レジストが無いものがその魔眼を浴びれば、どんな強力な媚薬よりも効く、と研究資料で読んだことがあった。まさにその魔眼が自分に向けられているのである。
（これ……ほどのものとは……きょうみ、ぶかい……な……）
などと考えているうちに、触手は肉の丘をとぐろを巻くように上り詰め、スーツ越しにも子供の小指ぐらいにふくれあがったように見える乳首をくきっと折り曲げた。
「はぁぉぉっっっ‼」
その瞬間ライリーの乳首から電撃が走り、脳を直撃した。
意識が一瞬真っ白になり、目の前がフラッシュアウトする。
（こんなに……か……！）
下腹がキュンと疼き、ごりごりと擦られているだけの秘唇が口を開け始め、奥から蜜が沸き立ち始める。まだかろうじてこぼれだしてはいないが、それも時間の問題だった。
バグベアードが今度は両乳首を魔眼でじっと見つめながら、ねっとりと揉み上げてきたのだ。
「はぁぁぁぁぁぁぅぅぅぅぅっっっっっ……くふぁ……うっ……くぅぁ、ぁん……！」
淫靡な魔力を持つ魔眼の効果を受けながら、敏感な肉突起を二つとも責められたのだからたまらない。ついに膣奥からとろとろと愛液がこぼれだしてきた。
スーツはいざというときにはそのまま排泄できるよう、液体を通しやすく出来ている。あっという間に戦闘服の給水容量を超えて、甘酸っぱい粘液が股間からこぼれだしてきた。
さらに魔眼で視姦されながら乳首を縦に、横にとクキクキ折り揉まれれればそのたびに激しい桃色の熱風が乳首から押し寄せ、ライリーの全身を熱く、甘く火照らせていく。

なおもパンチングボールのようにぷるんぷるんとはじかれれば、彼女自身が殴られているかのように
「おっっっ!!　おあぅっっっっ!!　おおぅっっっっ!!」
とショートヘアを振り乱してもだえてしまう。
もはや喘ぎは押さえることは出来ず、そのたびによだれと、珠のような甘酸っぱい発情汗があたりにきらきらと飛び散っていく。
はぐれ使い魔のまた使い魔である魔術感染者達はそんな程度のおこぼれでも預かろうとしてライリーの下に群がってくる。
彼らには魔法の力など無いはずだし、焦点もどこを見ているのかわからないほど合っていないのだが、数百人単位の視線が自分を視姦しているように思えてならない。
(く……みられる、ということが……こんなに恥ずかしく……きも……いや……!)
見られることに快感を感じ始めていることを頭を振って否定しようとするライリー。しかし研究者らしからぬ結果を認めようとしない彼女をしかるかのようにバグベアードの視線は動いた。
乳首から裏乳を眺め、形の良い縦長のおへそをジュッと焼いていく。
「はふ、はふ、う……く……」
(な、内臓が……電子レンジにかけられているよう……だ……!)
科学ベースで作られた気持ち程度の対魔法呪印などなんの効力もないらしく、魔眼の熱視線が内臓から戦闘研究者の内部を淫らに火照らせていく。
視線はそのまま下に降りて子宮をしばらく灼いた。
「おおおおお……うう……あは……あ、おおあああああ……!!」
まるで本当に火で焼かれているかのような強烈な火照りが下腹を襲った。手が拘束されていなければかきむしってしまいたいほどの強烈な熱い疼きだ。
狂ったように収縮を繰り返す子壺は、女性の本能に従って下へ降りていってしまう。それを追うかのように視線も下がり、最終的にバグベアードの赤い光はすでにぐしょ濡れになった割れ目へと向かった。
しかし、目玉魔の狙いは穴そのものではなかった。
(――まさか!?)
縦割れの頂点。そう、まだ皮を被ったままのクリトリスである。
スポット照明のようだった赤い魔眼の視線がすぅっと細まり、股間の一点に集中した。
「う……う……うううううう……あ……っっっっあっっ……あっっっっっ……あああああああああああああああっっっっっっっっっっっ!!」
(熱……いぃぃ……!!)
文字通り火が付いたようだった。
鋭敏な快感神経が内部から燃やされているような異常な感覚にライリーは文字通り目を剥いて、背骨も折れよとばかりにのけぞり返った。
股間からはスーツなど無いかのようにびゅるっ、びゅるっと白く濁った愛液が放たれ、なお滝のようにだらだらとこぼれ落ちる。
「みっっ、みるなぁあああああっっっっっっ!!　おおおおおおうううぁああ!!　そ、そこだけはみないでくれぇぇぇぇぇぇぇぇっっっっっっ!!」
半狂乱で泣きわめきながらの懇願も、バグベアードには通用しなかった。さらに視線を強めるかのようにじぃっと見つめ続ける。
やがて肉のフードもずるりと勝手に剥けて、スーツ越しにも肉色のルビーがくっきり透けて見えるようになった。そこへさらに集中するバグベアードの、そして数百の熱視線。
(だめ……だめだぁぁぁぁっっっ!　絶頂が、絶頂するのが止められないっっっっっっ……どうして、どうしてなんだぁぁぁぁぁ!!!)
頭の中で桃色の花火が何発も打ち上がり、見える物すべてが極彩色になる。
「おっっっっっっおっっっっっっおおおおおおおおーーーーーーーーーっっっっっっっっっっ!!」

MPD